

<原著>

看護・福祉系大学生における整理整頓への苦手意識に関連する要因

麻生保子^{1,2)}, 斉藤雅茂³⁾, 野尻由香⁴⁾, 望月由紀子⁵⁾,
下園美保子⁶⁾, 根本明日香²⁾, 山岡和枝²⁾

¹⁾ つくば国際大学医療保健学部

²⁾ 帝京大学大学院公衆衛生学研究科

³⁾ 日本福祉大学社会福祉学部

⁴⁾ 獨協医科大学看護学部

⁵⁾ 東邦大学看護学部

⁶⁾ 愛知県立大学看護学部

Factors related to consciousness of difficulty about organizing/tidying
up in nursing / welfare university students they have

Yasuko Aso^{1,2)}, Masashige SAITO³⁾, Yuka NOJIRI⁴⁾, Yukiko MOCHIZUKI⁵⁾,
Mihoko SHIMOZONO⁶⁾, Asuka NEMOTO²⁾, Kazue YAMAOKA²⁾

¹⁾ Faculty of Health Sciences, Tsukuba International University

²⁾ Teikyo University Graduate School of Public Health

³⁾ Faculty of Social Welfare, Nihon Fukushi University

⁴⁾ School of Nursing, Dokkyo Medical University

⁵⁾ Faculty of Nursing, Toho University

⁶⁾ School of Nursing & Health, Aichi Prefectural University

抄録

目的: 人の生活に深く関わる看護・福祉系大学生には対象者の療養生活支援のための生活技術の獲得が望まれる。一般市民に、整理整頓が苦手な人は多く、大学生の生活身辺処理能力と自尊感情に関する報告はあるが、看護・福祉系大学生の整理整頓への苦手意識に着目した調査報告はない。本研究では看護・福祉系大学生の整理整頓への苦手意識と居室の整理整頓状況、対象者特性との関連を検討し、効果的支援方法の策定に資する事を目的とした。

方法: 首都圏と中部地方の看護・福祉系大学生450人を対象に自己記入式調査を実施した。調査内容は整理整頓への苦手意識、整理整頓・掃除の実施者や自尊感情等の対象者特性、ためこみ状況によるストレス (SI-R)、居室の乱雑度 (CIR)、整理整頓の頻度とした。分析は整理整頓への苦手意識の有無を結果変数として、対象者特性の粗オッズ比および調整オッズ比を求めた。オッズ比 (95%信頼区間) はロジスティック回帰分析、変数選択はステップワイズ法を用いて推定した。次に整理整頓への苦手意識とSI-R得点、CIR得点、整理整頓・掃除の頻度との相関係数を求めた上で、それぞれに関連する項目を重回帰分析で求めた。有意水準は両側5%、解析はSAS9.4を用いた。

結果: 整理整頓への苦手意識 (有) の対象者特性による調整オッズ比は整理整頓の実施者が自分以外は2.77 (95%信頼区間: 1.29, 5.95)、自尊感情尺度得点は0.96 (同0.93, 0.99) であった。整理整頓への苦手意識とSI-R得点、CIR得点、整理整頓・掃除の頻度は互いに相関し、SI-R得点に関連がある項目は性別と自尊感情尺度得点、CIR得点に関連する項目は、学年、同居の有無、整理整頓の実施者、自

連絡先: 麻生保子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

6-8-33, Manabe, Tsuchiura-shi, Ibaraki, 300-0051, Japan.

Tel: 029-826-6622

E-mail: y-asou@tius.ac.jp

[平成29年9月25日受理]

尊感情尺度得点であった。整理整頓・掃除の頻度に関連する項目は学科、同居の有無、整理整頓の実施者であった。

結論：看護・福祉系大学生において整理整頓が苦手な者は自分で整理整頓・掃除を行わず、自尊感情が低い傾向があった。また、学年進行が進んでも整理整頓・掃除を「自分で行わない」学生は居室が乱雑で整理整頓・掃除の頻度が少ない傾向や、一人暮らしの学生は頻回に整理整頓・掃除を行っていても乱雑な居室状態の改善が進まない状況があった。今後はこれらの学生の整理整頓への苦手意識と自尊感情に配慮した整理整頓方法習得に向けた学習機会を設ける必要性が示唆された。

キーワード：看護・福祉系大学生、整理整頓への苦手意識、自尊感情

Abstract

Objectives: Individuals involved in nursing or social work should organize/tidy up to better serve patients. According to studies, several members of the general public have difficulty organizing/tying up, and the life-coping skills of undergraduates correlate with their score on the Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES); however, no study has examined whether nursing or social work students have difficulty in organizing/tying up. The current study aimed to examine difficulty in organizing/tying up in nursing or social work students, and factors related to this difficulty, and effective forms of support for students facing this difficulty.

Methods: The subjects were 450 nursing or social work students. Subjects completed a self-administered questionnaire asking whether one had difficulty in organizing and tidying up and how often one organized/tyed up. The questionnaire also included the Japanese version of the RSES, the Saving Inventory-Revised (SI-R), and the Clutter Image Rating (CIR) scale. In analysis, whether one had difficulty in organizing/tying up served as the outcome variable. Furthermore, crude and adjusted odds ratios (ORs) were calculated for subject characteristics. ORs (95% CI) were estimated using the logistic regression analysis (stepwise variable selection). In addition, multivariate regression analyses were performed with the hoarding condition as an objective variable and other survey items as explanatory variables. The significance level was two-tailed ($p < 0.05$), and the analysis was performed using SAS v9.4.

Results: Having difficulty in organizing/tying up was related to a low score on the RSES, and who organized/tyed up. Adjusted for subject characteristics, the OR for one's score on the RSES was 0.96 (95% CI: 0.93, 0.99) and that for having someone else organize/tyd up was 2.77 (95% CI: 1.29, 5.95). Difficulty in organizing/tying up, SI-R, CIR, and the frequency of organizing/tying up were correlated with each other. SI-R was related to sex and RSES, and CIR was related to the number of years in school, living alone or with someone else, who organized/tyed up, and RSES. The frequency of organizing/tying up was related to the department of school, whether the subject lived alone or with someone else, and who organized/tyed up.

Conclusion: In nursing or social work students, difficulty in organizing/tying up was related to low self-esteem and the habit of not organizing/tying up for oneself.

Despite being organized frequently, there was a situation when students living alone did not advance improvement of one's room clutter. Organizing/tying up skills should be taught based on an individual's self-esteem level.

keywords: nursing or social work students, organizing/tying up, self-esteem

(accepted for publication, 25th September 2017)

I. 諸言

近年、極端に不衛生な住環境（通称「ゴミ屋敷」）の問題は公衆衛生学的見地からも社会問題化している。具体的なゴミ屋敷事例への取り組みとしては、足立区や大阪市をはじめとする生活環境保全条例等による行政処分としての支援や、町会・自治会等との連携による根本解

決を目指す試みがあげられる[1,2]。対象者が高齢者である場合、地域包括支援センターにおける社会福祉士・看護職・介護支援専門員らによる生命、安全を支援する取り組みが行われているが、多くの事例は対応困難事例として保健福祉担当者はその対応に苦慮している[3]。

欧米ではDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition (DSM-5) (以下DSM-5) [4,5]によるHoarding (日

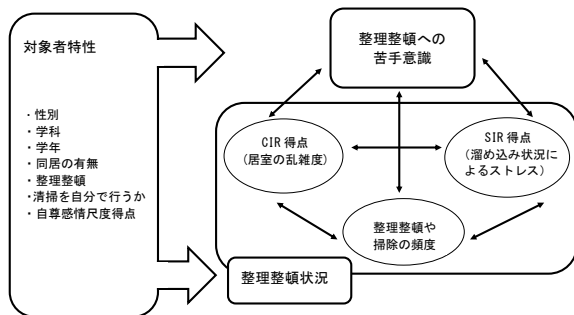


図1 整理整頓への苦手意識に関連する要因 (概念図)

本名「ためこみ症」への対応として, 整理整頓専門会社・心理・看護職等がチームを組んで本人を支援するシステムが一部出来上がり, 認知行動療法も一定の効果をあげるなど[6], 先進的事例が効果を上げているが, 我が国においての対応は始まったばかりである。

一方, 医療機関では, 医療安全の取り組みから「整理, 整頓, 清掃, 清潔, 躰」を徹底する5S活動を推進する機関が国内外で増加している。5S活動は不要な物品を捨て, 使いやすく配置された状態を維持し, 点検整備を習慣化することにより, 危険回避行動を導き, 事故防止へ貢献する活動である[7]。看護・福祉系大学生は将来, 対象者の生活に深く関わり患者の生活支援を行うことが求められ[8,9], 療養者の安全を守るための整理整頓を始めとする生活技術を獲得していることが望まれている[10,11]。しかしながら現状では, 社会状況の変化から家庭内での手伝いの経験が減り, 掃除等を始めとする日常生活技能の不器用さの報告[12]からも, 自らの居室の整理整頓への苦手意識を抱えている可能性がある。一般市民を対象とした調査では, 整理整頓ができない傾向が強い者は, 自分の能力に自信がなく, ストレスへ前向きに対処することができずに, さらに整理整頓ができない状況が悪化するという報告もある[13]。また, 一般大学生の健康管理や自分の部屋の掃除技術の獲得等「生活身辺的自立」には自尊感情尺度得点に関係することが報告されている[14]。

本研究では, 看護・福祉系大学生を対象とした横断調査結果をもとに, 整理整頓への苦手意識は, 対象者の居室の整理整頓状況と自尊感情に関連する事を仮説とし, その関係性を明らかにすることにより, 効果的支援方法の策定に資することを目的とした。(図1)

II. 方法

1. 調査対象

首都圏私立医療系大学生2～3年生205名, 中部地方の私立福祉系大学生1～4年生245名(男性147名, 女性303名)を対象として, 2014年12月に自己記入式調査を実施した。

2. 用語の操作的定義

「整理整頓」とは, 物を必要な物と不要な物に分け, 不要な物を捨て必要な物を使いやすい場所に置くこと, 「掃除」は, ゴミ, 汚れ, ほこりを取り除くことと定義する。

「ためこみ状況によるストレス」とは, 限られた価値しかないように思われる物を入手し, 大量の所有物を処分することがうまくできない事から, 生活空間がかなり乱雑となり, 生活機能の支障や苦悩が生じている状態と定義する。

3. 調査内容

対象者特性としては性別, 学科, 学年, 家族や友人との同居の有無, 整理整頓・掃除の実施者, および自尊感情を取り上げた。また, 整理整頓への苦手意識の有無と整理整頓状況を示す項目として, ためこみ状況によるストレス, 居室の乱雑度, 整理整頓・掃除の頻度(5件法)を加え, 自己記入式調査票により回答を得た。

1) 自尊感情

山本・松井・山成が翻訳したRosenberg自尊感情尺度を使用した。この自尊感情は, 他者との比較により生じる優越感や劣等感でなく, 自身で自己への尊重や価値を評価する程度を捉えるものである。本尺度は10項目の調査項目で構成され, 得点範囲は10から50で, 高いと自尊感情が強いことを示す(以下, これを自尊感情尺度得点と記す)[15]。一般大学生において, 清掃等の身辺自立の状態と自尊感情には関連があることが報告されており[14], 本研究では対象者特性の1つとして取り上げた。

2) ためこみ状況によるストレス (SI-R得点)

ためこみ状況によるストレスの測定には「SI-R」を用いた。これは原版をSaving Inventory-Revised (SI-R)[16]とし, (以下, 「SI-R」とする), 2013年のDSM-5[4,5]により独立した障害区分として認定された「ためこみ症」と, それによる精神的苦痛や生活への支障を測定する23項目で構成される自己記入式調査票である。0～92の範囲で得点され, 得点が高いとためこみ状況によるストレスが強いことを示す(以下, これを「ためこみ状況によるストレス得点」[SI-R得点]と記す)。

本研究で使用した日本語調査票は土屋垣内らが2015年5月に開発したSI-R日本語版[17](以下, 「SI-R日本語版」とする)と同内容の質問項目を独自に翻訳したものである。本調査実施時点では土屋垣内らの日本語訳での尺度の信頼性, 妥当性の検討結果は公表されていなかったため, SI-Rの翻訳, 使用, 分析, 公表に当たり原作者の許可を得て本調査実施に先立ち, 妥当性・信頼性の評価のための調査を別途実施し, この独自の翻訳版(以下, 「ためこみ状況によるストレス」調査票と記載)を作成したものである。妥当性・信頼性の評価結果と経緯については付録に詳細を記載した。付録に示すように, 土屋垣内版と今回作成した翻訳版についてはほぼ同等の「ためこみ状況によるストレス」の把握が可能と考えられ,

今回使用の翻訳版により検討を行うことは大きな問題はないと考えられた。

3) 居室の乱雑度 (CIR得点)

居室の乱雑度はClutter Image Rating (CIR) を用いて測定した。CIRは台所、居間、寝室の乱雑度を9つの写真の中から選び、判定する自己記入式評価尺度であり、2007年に米国で開発された[18,19]。それぞれの部屋の乱雑状態は1(整理整頓された状態)～9(物が天井にまで積まれている状態)に写真で表現されている(以下、CIR得点と記す)。原版は内的整合性 ($\alpha=0.84$)、再検査信頼性 ($r=0.82$)、観察者間信頼性 ($r=0.78$) と報告され、対象者の居室の乱雑度を評価する尺度として信頼性・妥当性があるとされている[18]。本調査でCIRを使用することを原版作者から許可を得て、総得点および部屋別得点を算出した。

4) 整理整頓・掃除の頻度

整理整頓の頻度は5件法で回答を受け、「ほぼ毎日」を1、「2～3日に1度」を2、「週に1回程度」を3、「月に1回程度」を4、「決まっていない」を5とコード化し、得点として算出した。

4. 倫理的配慮

調査開始に当たり、本研究の目的、意義、方法、研究責任者、個人情報取り扱い、研究への自由意思参加、同意取り消しの自由等を口頭または文章で説明し、回答を持って同意を得たものとした。本研究では分析に際して個人を特定しておらず、研究実施機関の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 帝倫14-145号、「人を対象とする研究」に関する倫理委員会承認番号14-36)。

5. 分析方法

1) 対象者特性

対象者特性として性別、学科、学年、同居の有無、整理整頓・掃除の実施者および自尊感情尺度得点の要約統計量を求めた。カテゴリー変数については頻度と割合により、連続変数については平均値と標準偏差により要約した。

2) 整理整頓への苦手意識に関連する対象者特性の検討

整理整頓への苦手意識の有無を結果変数とし、対象者特性として性別、学科、学年、同居の有無、整理整頓・掃除の実施者、自尊感情尺度得点を説明変数とした単変量ロジスティック回帰モデルおよび説明変数をすべて調整した多変量ロジスティック回帰モデルにより分析し、関連性をオッズ比(95%信頼区間)により示した。多変量ロジスティック回帰モデルでの変数選択はステップワイズ法(取り入れ基準、取り除き基準は各20%)によった。

3) 整理整頓への苦手意識と整理整頓状況との関連

整理整頓への苦手意識とSI-R得点、CIR得点、整理整頓・掃除の頻度との関連をPearsonの積率相関係数により求めた。

4) 整理整頓状況に関連する要因の検討

対象者の整理整頓状況を示すSI-R得点、CIR得点、整理整頓・掃除の頻度を結果変数として、対象者特性(性別、学科、学年、同居の有無、整理整頓・掃除の実施者、自尊感情尺度得点)を説明変数とした重回帰分析により関連性を分析し関連の相違について比較検討した。

以上の分析では統計学的有意水準は両側5%とし、解析にはSAS9.4を用いた。

III. 結果

1. 対象者の概要

対象者の概要を表1に示す。整理整頓への苦手意識の有無では「苦手意識あり」が60.0%を占め、整理整頓・掃除を「自分で行う」者は90.4%を占めていた。自尊感情尺度得点の平均値は28.9(標準偏差6.4)、SI-R得点の平均値は32.2(標準偏差13.0)であった。また、SI-Rを用いてためこみ症が疑われるカットオフ値とされる41以上[17]を得点した者は117人(26%)であった。CIR得点の平均値は1.6(標準偏差0.7)であり、整理整頓・掃除の頻度は「ほぼ毎日行う」者は4.9%と少なく、「月に1回程度」「決まっていない」の者で過半数を占めていた。

2. 整理整頓への苦手意識に関連する対象者特性の検討

整理整頓への苦手意識を結果変数とし、対象者特性としてとらえた性別、学科、学年、同居の有無、整理整頓・掃除の実施者、自尊感情尺度得点を説明変数としたロジスティック回帰モデルを用いて求めたオッズ比(95%信頼区間)により整理整頓への苦手意識への関連項目の検討を行った(表2)。単変量解析の結果では、整理整頓への苦手意識に関連のあった項目は、同居の有無、整理整頓・掃除の実施者、自尊感情尺度得点であり、「一人暮らし」の者より「家族または友人と同居」している者に「苦手意識あり」が多く(粗オッズ比:1.49, 95%信頼区間:1.01, 2.21, $p=0.044$)、整理整頓・掃除を「自分で行う」者より「自分では行わない」者に「苦手意識あり」が多い傾向が見られた(粗オッズ比:2.74, 95%信頼区間:1.28, 5.86, $p=0.009$)。自尊感情尺度得点では「苦手意識あり」の平均値は28.3(標準偏差6.6)、「苦手意識なし」は29.7(標準偏差6.0)であり、「苦手意識あり」で自尊感情尺度得点が低い傾向が示された(「苦手意識あり」の「同なし」に対する粗オッズ比:0.97, 95%信頼区間:0.94, 0.99, $p=0.028$)。一方、多変量解析(ステップワイズ法)による調整オッズ比では、整理整頓・掃除への実施者のオッズ比は2.77(95%信頼区間:1.28, 5.95, $p=0.009$)、自尊感情尺度得点では0.96(95%信頼区間:0.93, 0.99, $p=0.015$)が有意であり、これら2つの変数に関しては単変量解析の結果とほとんど変わらなかった。

表 1 対象者の概要 (n = 450人)

特性		人数, %または平均値(標準偏差)	
性別	男性	147	32.7 %
	女性	303	67.3 %
学科	社会福祉学科	245	54.4 %
	看護学科	205	45.6 %
学年	1 年	210	46.7 %
	2 年	133	29.6 %
	3 年	24	5.3 %
	4 年	83	18.4 %
同居の有無	一人暮らし	162	36.1 %
	家族または友人と同居	287	63.9 %
	欠測	1	
整理整頓や掃除を自分で行うか	自分で行う	407	90.4 %
	自分では行わない	43	9.6 %
自尊感情尺度得点 ^a , 平均 (標準偏差)		28.9	(6.4)
整理整頓の苦手意識			
		あり	270
		なし	180
整理整頓状況			
SI-R得点 ^b , 平均 (標準偏差)		32.2	(13.0)
CIR得点 ^c , 平均 (標準偏差)		1.6	(0.7)
整理整頓や掃除の頻度	ほぼ毎日	22	4.9 %
	2 ~ 3 日に 1 回	58	12.9 %
	週に 1 回程度	138	30.7 %
	月に 1 回程度	69	15.3 %
	決まっていない	163	36.2 %

a: 自尊感情尺度得点は点数が高いと自尊感情が高いことを示す

b: SI-R得点は点数が高いとためこみ状況によるストレスが多いことを示す

c: CIR得点は点数が高いと居室の状況が乱雑な度合いが大きいことを示す

表 2 整理整頓への苦手意識と対象者の特性 (ロジスティック回帰分析)

説明変数	苦手意識あり n=270	苦手意識なし n=180	単変量解析 ^a			多変量解析 ^a (ステップワイズ法 ^b)		
			粗オッズ比	95% 信頼区間	p 値	多変量調整 オッズ比	95% 信頼区間	p 値
性別, n (%)								
男性	83 (56.5)	64 (43.5)	1					
女性	187 (61.7)	116 (38.3)	1.24	0.83, 1.85	0.286	-		-
学科, n (%)								
社会福祉学科	140 (57.1)	105 (42.9)	1			1.00		
看護学科	130 (63.4)	75 (36.6)	1.30	0.90, 1.92	0.157	1.41	0.95, 2.09	0.089
学年, n (%)								
1 年	121 (57.6)	89 (42.4)	1					
2 年	83 (62.4)	50 (37.6)	1.22	0.78, 1.90	0.621	-		-
3 年	14 (58.3)	10 (41.7)	1.03	0.44, 2.43	0.801	-		-
4 年	52 (62.7)	31 (37.4)	1.23	0.73, 2.08	0.628	-		-
同居の有無, n (%)								
一人暮らし	87 (53.7)	75 (46.3)	1					
家族または友人と同居	182 (63.4)	105 (36.6)	1.49	1.01, 2.21	0.044	-		-
整理整頓や掃除を自分で行うか, n (%)								
自分で行う	236 (58.0)	171 (42.0)	1			1.00		
自分では行わない	34 (79.1)	9 (20.1)	2.74	1.28, 5.86	0.009	2.77	1.29, 5.95	0.009
自尊感情尺度得点, 平均(標準偏差) ^c	28.3 (6.6)	29.7 (6.0)	0.97	0.94, 0.99	0.028	0.96	0.93, 0.99	0.015

a: 従属変数を「整理整頓の苦手意識」の「あり」をイベントとしてロジスティック回帰分析により分析をした

b: ステップワイズ法での取り入れ、取り除き基準は20%とした

c: 自尊感情尺度得点は点数が高いと自尊感情が高いことを示す

注) ステップワイズ法で選択されなかった変数は “-” で示した.

表3 整理整頓への苦手意識と整理整頓状況 (Pearsonの積率相関係数)

	整理整頓への 苦手意識	SI-R 得点	CIR 得点	整理整頓や 掃除の頻度
整理整頓への苦手意識 (「あり」=1, 「なし」=0)	—	0.41 (p <0.001)	0.41 (p <0.001)	0.29 (p <0.001)
ためこみ状況によるストレス (SI-R 得点) a		—	0.48 (p <0.001)	0.35 (p <0.001)
居室の乱雑度 (CIR 得点) a			—	0.36 (p <0.001)
整理整頓や掃除の頻度 b				—

a: 高いほうが状態が悪い

b: 「ほぼ毎日」=1, 「2～3日に1回」=2, 「週に1回程度」=3, 「月に1回程度」=4, 「決まっていない」=5

表4 整理整頓状況と対象者の特性 (重回帰分析)

	SI-R 得点 a (n=411)			CIR 得点 a (n=433)			整理整頓・掃除の頻度 b (n=446)		
	回帰係数	標準誤差	p 値	回帰係数	標準誤差	p 値	回帰係数	標準誤差	p 値
性別 (男性 =1, 女性 =2)	2.93	1.33	0.028	0.26	0.16	0.098			
学科 (社会福祉学科 =1, 看護学科 =2)	-		-	-		-	-0.23	0.12	0.048
学年 (1～4年)	-		-	0.18	0.07	0.011			
同居の有無 (一人暮らし =1, 家族または友人と同居 =2)	-		-	-0.38	0.17	0.023	0.72	0.12	<.0001
整理整頓や掃除を自分で行うか (自分で行う =1, 自分では行わない =2)	3.74	2.09	0.073	0.92	0.28	0.001	0.42	0.19	0.029
自尊感情尺度得点 c	-0.51	0.09	<.0001	-0.03	0.01	0.007	-0.02	0.01	0.051
自由度調整済み決定係数	0.08			0.06			0.10		

a: SI-R得点はためこみ状況によるストレスを, CIR得点は居室の乱雑度を示し、ともに点数が高い方が状態が悪いことを示す

b: 「ほぼ毎日」=1, 「2～3日に1回」=2, 「週に1回程度」=3, 「月に1回程度」=4, 「決まっていない」=5

c: 高い方が状態が良い

3. 整理整頓への苦手意識と整理整頓状況との関連

整理整頓への苦手意識の有無と整理整頓状況 (SI-R得点, CIR得点, 整理整頓・掃除の頻度) との関連について Pearson の相関係数を求めたところ, すべて統計学的に有意であり, Pearson の相関係数は 0.29 から 0.48 までと弱～中程度 ($p < 0.001$) であった (表 3)。

4. 整理整頓状況に関連する要因の検討

整理整頓状況に関連する要因を検討することを目的とし, SI-R得点, CIR得点, 整理整頓・掃除の頻度を結果変数, 対象者特性を説明変数として重回帰分析により分析した結果, SI-R得点は性別と自尊感情尺度得点と有意に関連し, 女性の SI-R得点が高く ($p = 0.028$), 自尊感情が低い者は SI-R得点が高い傾向があった ($p < 0.001$)。CIR得点は学年, 同居の有無, 整理整頓・掃除の実施者, 自尊感情尺度得点との関連が認められ, 学年が高い ($p = 0.011$), ひとり暮らし ($p = 0.023$), 整理整頓・掃除を「自分で行わない」($p = 0.001$), 自尊感情尺度得点が高い ($p = 0.007$) と CIR得点が高く, 状態が悪い傾向があった。整理整頓・掃除の頻度に関連する項目は学科, 同居の有無, 整理整頓の実施者であり, 社会福祉学科 ($p = 0.048$), 家族または友人と同居 ($p < 0.001$), 整理整頓・掃除を自分では行わない ($p = 0.029$) に整理整頓・

掃除の頻度が少ない者が多かった (表 4)。

なお, 本調査における同居の有無と整理整頓や掃除の実施者に関する交互作用は認められなかった。

また, 以上の分析においての欠測値の取り扱いに関しては, 各設問の欠測率は SI-R得点 0.4%, 自尊感情尺度 0.1%, CIR得点 3.2% であり, 欠測値を抜いての分析と欠測値に質問ごとの平均値および, 回答者別平均値をそれぞれ代入して解析を行った結果に大きな違いはなく, 本研究では欠測値を除いて分析した結果を示した。

IV. 考察

本研究は, 看護・福祉系大学生における整理整頓への苦手意識とそれに関連する要因を自己記入式調査にて実施し検討した。その結果, 整理整頓への苦手意識の有無は, 整理整頓・掃除の実施者と自尊感情尺度得点に関連し, さらに整理整頓状況 (SI-R得点, CIR得点, 整理整頓・掃除の頻度) と相関した。さらに SI-R得点に関連する対象者特性は性別, 自尊感情尺度得点であり, CIR得点と関連するのは学年, 同居の有無, 整理整頓・掃除の実施者, 自尊感情尺度得点であった。整理整頓・掃除の頻度に関連するのは学科, 同居の有無, 整理整頓・掃除の実施者であり, 整理整頓への苦手意識, SI-R得点,

CIR得点においては自尊感情意識が低いほど状態が悪いことが分かった。

1. 整理整頓への苦手意識に関連する対象者特性

本調査において整理整頓への苦手意識を持つ者の割合は約6割であったが、2015年の20～59歳女性412人、2016年20代～60代の男女125人を対象とした民間調査会社によるインターネット調査では「自宅の片づけができていない・ややできていない」と回答した割合が53%、整理整頓・掃除が「得意ではない」と回答した者が52.8%と、本調査結果での結果と類似していた[20,21]。

わが国において、住居の整理整頓方法を学ぶ機会は、家庭教育の他、学校教育での家庭科または生活科によることが多い。家庭科学習における知識や技能の定着度調査では、「衣・食・住」の3領域のうち「衣」「食」領域は中学、高校、大学へと進む事に伴い定着度が増加するのに対し、「住」領域の定着度は低いままであるという報告がされている[22-26]。首都圏の小・中・高校生の保護者の状況からは、子供の生活に関する悩みを「整理整頓・片づけ」とするものが最も多く（52.4%）「整理整頓・片づけ」方法の修得に関する問題が浮き彫りにされていた[27]。「整理整頓・片づけ」に関しては、快適な日常生活を送るうえで必要なスキルであるが、現実が伴わないことによるギャップが大きく、前述の民間調査会社の報告や高校生の保護者を対象とした結果を考えると、広く一般市民にとっても大きな悩みの種となっていることが伺える。今回の調査において、整理整頓への苦手意識と整理整頓状況は互いに相関していたが、整理整頓が苦手な場合、居室の整理整頓・掃除の頻度が少なくなり、乱雑な居室によるストレスが増加する可能性がある。今回の状況は、米国での既報告での整理整頓ができない者は、自分の能力に自信がなく、ストレスへ前向きに対処することができずに、さらに状況が悪化する報告[13]とも一致することから、早期からの悪化予防としての対策が必要である。

また、本結果において、整理整頓への苦手意識は整理整頓・掃除の実施者とも関連があり、自分が使用する部屋の整理整頓を「自分では行わない」者は「自分で行う」者に比べ2.77倍、整理整頓が苦手であるという結果であった。苦手であるから行わないのか、自分以外が行うことから経験不足により技術が未修得であることが原因か、等については言及できないものの、整理整頓が苦手な者が、その技術を学ぶ機会を得る事は必要であろう。また、自尊感情尺度得点が低く自己評価が低い者にも整理整頓への苦手意識を持つ者が多かった。大学生の生活身辺処理能力と自尊感情尺度得点には関連があり、生活身辺処理能力が劣っている者は自尊感情が低いことが報告されている[14]。今回の対象学生である看護・福祉系大学生の自尊感情尺度得点の平均値（28.9点）は既報告の大学生の自尊感情尺度得点平均値である31.7点[14]に比べて低値であったことを考えると、看護・福祉系大学

生への自尊感情に配慮した整理整頓技術教育を含む生活身辺処理能力向上のための教育は必要であると考ええる。

2. 整理整頓状況に関連する対象者の特性

本調査におけるSI-R得点平均値は、32.2（標準偏差13.0）であり、女性にSI-R得点が高い傾向が認められた。ストレス全般に関する自己開示性調査では性差が認められることから[28-30]、今回の調査においても自己開示性による性差との関連があった可能性もある。一方、日本の一般青年を対象とした土屋垣内らの研究結果によるSI-R得点の平均値の27.97に比べて本研究対象者のSI-R得点平均値はやや高く、臨床的に問題となる41以上の割合も26.0%と土屋垣内ら結果による17.5%に対し[17]、この割合も多かった。他方、本対象者のCIR得点平均値は1.6（標準偏差0.7）で、土屋垣内らの結果である1.6（±0.7）[17]と同等であった。CIR得点による評価がほぼ同等の結果であるのに対し、SI-R得点が高かったことは、実際の居室の状態に比べて、ためこみによる主観的なストレスが高かったと言える。看護・福祉系大学生は、療養者の安全を守るための整理整頓状況の重要性について学んでおり[8,9]、自室の乱雑な整理整頓状況に関しても敏感であった可能性がある。そのため、一般大学生に比べ、実際の状況以上に居室の乱雑状態へのストレスが大きかったことが予想される。

同時に学年進行と一人暮らし、整理整頓や掃除を自分で行わない、自尊感情得点が低い者にCIR得点が高く状態が悪い者が多かった。また、家族または友人と同居、整理整頓・掃除を自分で行わない者に整理整頓・掃除の頻度が少ない者が多かった。これらから、一人暮らしの者は整理整頓・掃除の頻度が多い割には居室が乱雑な傾向があることが読み取れる。前述の、家庭内での手伝いの経験不足等による日常生活技能の不器用さや家庭科・生活科による「住」領域の定着度の低さが裏付けするように、整理整頓技術が身につけていない状態で一人暮らしを行い、自らの努力で整理整頓の頻度は多く行っているものの、居室の乱雑状態はさほど改善されず、逆に家族や友人等自分以外の者が整理整頓・掃除を行ってくれる場合は、CIR得点が良いに保たれている可能性がある。居室の乱雑状況と自尊感情尺度得点が関連していたことと、大学生の生活身辺自立と自尊感情の関連結果[14]を合わせて考えると、SI-R得点やCIR得点が高値であった学生に対しては生活身辺自立に関する技術と困難感について確認し、効果的介入方法を検討することが今後の課題である。

また、今回の学生は、学年進行に伴い、CIR得点が悪化していた。看護・福祉系大学生は両者とも学年進行に伴い実習時間が増え、居室の整理整頓に時間をかけられなかった事も考えられる。今回の研究では、実習によるストレスが整理整頓への苦手意識に与える影響については検討していない。ヒューマンケアを学ぶ学生は、学年進行や実習により強いストレスを認識する者が多いとい

う報告もあり[31,32]。一般学生との比較等による看護・福祉系大学生の実習ストレスとCIR得点に関する検討なども含めて、これらの点についても今後の課題である。

3. 本研究の限界

本研究の対象者は首都圏および地方都市における2大学での調査であり、必ずしも看護・福祉系大学生全般を代表するものではない。本対象が特殊な大学生ではないとは考えられるが、本研究結果の解釈においてはその点に十分留意する必要がある。今後は本調査結果を踏まえ、対象者の居住地域を考慮した、より代表性の高い対象者による検討も必要と考える。

V. 結論

看護・福祉系大学生において整理整頓への苦手意識は整理整頓・掃除の実施者、自尊感情と関連があり、SI-R得点、CIR得点は得点が高い者ほど自尊感情が低く状態が悪かった。また、整理整頓への苦手意識と整理整頓状況には相関があり、学年進行が進んでも整理整頓・掃除を「自分で行わない」学生に居室が乱雑で整理整頓・掃除の頻度が少ない傾向や、一人暮らしの学生は頻回に整理整頓・掃除を行っていても乱雑な居室状態の改善が進まない状況があった。今後はこれらの学生の整理整頓への苦手意識と自尊感情に配慮した整理整頓方法習得に向けた学習機会を設ける必要性が示唆された。

本研究はJSPS科研費26671045（代表：麻生保子）の助成を受けて実施したものです。開示すべきCOI関係にある企業はありません。

謝辞

本研究にあたりご協力を頂きました対象者の皆様、また、本研究遂行にあたりご助言を頂いた東邦大学 岸恵美子先生、上智大学 小長谷百絵先生、佛教大学 浜崎優子先生、帝京科学大学 吉岡幸子先生、法務省 野村祥平先生、Boston University Gail Steketee先生、Smith College Randy O. Frost先生に深謝いたします。

引用文献

- [1] 足立区。足立区生活環境の保全に関する条例。足立区条例第39条。
- [2] 大阪市。大阪市住居における物品等の堆積による不良な状態の適正化に関する条例。大阪市条例第133号。
- [3] 麻生保子、望月由紀子、下園美保子、野尻由香、岸恵美子、浜崎優子。極端に不衛生な家で生活する高齢者を支援する地域包括支援センター職員の職種別介入方法の比較。第3回日本公衆衛生看護学会学術集会；2015.1.10-11；神戸。同講演集。p.197。
- [4] American Psychiatric Association, and American Psychiatric Association. Diagnostic and statistical manual of mental disorders (DSM). Washington, DC: American psychiatric association; 1994. p.143-147.
- [5] 日本精神神経学会精神科病名検討連絡会。DSM-5病名・用語翻訳ガイドライン(初版)。精神神経学雑誌。2014;116(6):429-457。
- [6] David FT, Randy OF, Gail S, Jordana M. Cognitive behavioral therapy for hoarding disorder: A meta-analysis. Depression and Anxiety. 2015;32(3):158-166。
- [7] 小林美雪。整理・整頓ができていないとなぜ危ないのか。ナーシングビジネス。2010;4(12):1059-1061。
- [8] 厚生労働省。保健師助産師看護師国家試験出題基準(平成26年度版)。
- [9] 公益財団法人社会福祉振興・試験センター。社会福祉士国家試験出題基準、介護福祉士国家試験出題基準、精神保健福祉士国家試験出題基準。http://www.sssc.or.jp/index.html (accessed 2017-02-12)
- [10] 千葉敦子、細川満子、山本春、富田恵、戸沼由、山田典子、他。在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態度—訪問看護ステーション実習指導者に対するアンケート調査—。青森保健大雑誌。2010;11:61-66。
- [11] 宮下裕一、布施千草、清宮宏臣。地域生活支援の現状を通じた介護福祉教育の再検討(第2報): 2つの調査結果をもとに。植草学園短期大学紀要。2013;14:87-96。
- [12] 川田智美、木村由美子、木暮深雪、小林三重子、林元子、狩野太郎。看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面。群馬保健学紀要。2006;26:133-140。
- [13] Grossman S. Chronic disorganization, self-efficacy, and coping as predictors of depressive symptoms in women. Fordam University. 2009. p.3-84。
- [14] 大石美佳、松永しのぶ。大学生の自立の構造と実態。Journal of Home Economics of Japan. 2008;59(7):461-469。
- [15] 山本真理子、松井豊、山成由紀子。認知された自己の諸側面の構造。教育心理研究。1982;30(1):64-68。
- [16] Frost RO, Steketee G, Grisham JR. Measurement of compulsive hoarding: saving inventory-revised. Behavior Research and Therapy. 2004;42(10):1163-1182。
- [17] 土屋垣内晶、黒宮健一、五十嵐透子、堀内聡、安藤孟梓、鄧科、他。ためこみ傾向を有する日本の青年の臨床的特徴。不安症研究。2015;6(2):72-85。
- [18] Frost RO, Steketee G, Tolin DF, Renaud S. Development and validation of the clutter image rating. Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment. 2008;30(3):193-203。
- [19] Steketee G, Frost RO. Compulsive hoarding and

- acquiring. U.S.A: Oxford University Press ; 2007. 五十嵐透子, 訳. ホーディングへの適切な理解と対応 認知行動療法アプローチ セラピストガイド. 東京: 金子書房; 2013.
- [20] フェリシモ. 整理と収納に関する意識調査. <http://www.felissimolife.jp/image/clean/FelissimoOkatadukeReport2015.pdf> (accessed 2017-2-12)
- [21] LIXIL. キッチン内の整理整頓と道具や「もの」のもちかたについて. http://kitchen-kaigi.jp/column/24?_ga=1.164168633.742862155.1478998964 (accessed 2016-11-13)
- [22] 田中志穂, 内田恵美子. 家庭科学習の定着度. 教育実践総合センター研究紀要. 2010;19:53-59.
- [23] 速水多佳子, 関川千尋. 学校教育における住居領域の教育システムの有効性について. 日本家政学会誌. 2000;51(4):317-330.
- [24] 宮崎陽子, 多治見左近. 家庭科住居領域における学習内容の構造に関する試行的研究. 日本建築学会計画系論文集. 2012;77(674):873-880.
- [25] 宮崎陽子, 岸本幸臣. 大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題. 日本家政学会誌. 2008;59(4):245-253.
- [26] 宮崎陽子, 岸本幸臣. 家庭科における住宅問題・住宅政策学習に関する基礎的研究: 教育・福祉系学生の意識からみる学習の可能性. 大阪教育大学紀要. 2006;54(2):35-48.
- [27] 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究. 子どもの生活と学びに関する親子調査 2015. <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4848> (accessed 2016-07-10)
- [28] 榎本博明. 自己開示研究の展望(2): 自己開示の集団差. 中京大学教養論叢. 1990;31(1):207-229.
- [29] 八田純子. 青年期のソーシャル・サポート利用について(2)原因帰属と自己開示. 心身科学: 愛知学院大学心身科学研究所紀要. 2013;5(1):51-61.
- [30] 榎本博明. 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について. 心理学研究. 1987;58(2):91-97.
- [31] 正村啓子, 岩本美江子, 市原清志, 東玲子, 藤澤怜子, 杉山真一, 國次一郎, 奥田昌之, 芳原達也. 臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討. 山口医学. 2003;52(1,2):13-21.
- [32] 大西良, 藤島法仁, 占部尊士, 鋤田みすず, 矢島雅子, 保坂恵美子. 福祉学生のストレスに関する研究. 久留米大学文学部紀要. 社会福祉学科, 編. 2006;6:47-66.

付録. 「ためこみ状況によるストレス調査票」の信頼性・妥当性の検討

1. 概要

「ためこみ状況によるストレス調査票」(SI-Rの日本

語版)は, 土屋垣内らが2015年5月に開発したSI-R日本語版[9]と同内容の質問項目を翻訳したものである. 本調査実施時点では日本語訳での尺度の信頼性, 妥当性の検討結果は公表されていなかったため, 著者らは2014年6月に原作者に翻訳と使用, 公表の承諾を得て日本語訳での尺度の信頼性, 妥当性を検討するための調査を2014年12月~2015年1月に首都圏私立医療系大学生2~3年生450名を対象に実施していたものである. なお「ためこみ状況によるストレス調査票」の再現性の検討では, 第1回調査実施者のうち第2回調査に同意した首都圏私立医療系大学生205名を対象に, 同一調査票による再テスト法(2~4週間の間隔)を実施して検討を行った.

なお, 本尺度での信頼性, 妥当性に関しては, 同一原版に関する翻訳版が2つ存在することは読者の混乱をもたらす可能性もあるため, 本研究では付録として実証結果をまとめるに留めた.

2. 方法

(1) 信頼性に関する検討

「ためこみ状況によるストレス調査票」の再現性に関する検討は再テスト法により, 内的整合性はクロンバックのアルファ係数(Cronbach, 1951)により検討を行った.

(2) 妥当性の検討

構造的妥当性として因子分析(斜交回転)により原版と同様の因子が抽出できるかについて検討した. 基準関連妥当性として「ためこみ状況によるストレス」(SI-R)得点をCIR得点と級内相関係数(Intraclass Correlation Coefficient, ICC)を用いて比較した.

(3) 翻訳の相違による得点の差についての検討

2つの翻訳版を無作為に2群に分けた対象で回答を受け, 得点の相違を検討した.

3. 結果および考察

(1) 信頼性に関する検討

再テスト法による第1回目調査と第2回目調査による総得点のICCは0.74, クロンバックのアルファ係数は0.89と比較的高い値が得られ, 「ためこみ状況によるストレス調査票」は一定の信頼性が認められたと解釈した.

(2) 妥当性の検討結果

・構造的妥当性の検討

原版の意図に合わせ, 最尤法, 斜交回転による因子分析を行った. 因子分析の結果, 原版とほぼ同様の因子構造を呈しており, 構造的妥当性は認められたと解釈した(付図1).

・基準関連妥当性の検討

「ためこみ状況によるストレス調査票」総得点とCIR得点とのスピアマン順位相関係数は0.51($p < 0.001$)と有意な相関が認められ, 「ためこみ状況によるストレス調査票」は基準関連妥当性を持つと考えられた.

(3) 2つの翻訳版による得点の相違の検討

184人の回答者を無作為に2群に分け, 2つの翻訳版で

因子名および質問項目概要	カテゴリ別回答数と欠損値						第1因子	第2因子	第3因子
	0	1	2	3	4	欠損	30.90%	11.70%	6.70%
				7.11			7.11	2.7	1.55
							散らかり	処分困難	過剰入手
散らかり									
3 使用できないスペースの量	138	178	77	51	5	1	0.826	0.248	0.13
1 居住空間に散らかっている物の量	22	184	151	75	17	1	0.809	0.239	0.097
5 通れないスペース	248	108	65	23	6	0	0.802	0.21	0.152
8 部屋の散らかり	31	184	144	79	11	1	0.83	0.361	0.104
20 散らかりが原因で家に人を呼べない頻度	131	113	75	66	62	3	0.723	0.368	0.122
15 整理整頓ができないと、感じる程度	45	124	130	113	37	1	0.725	0.464	0.178
22 散らかりが原因で目的通りに使えない場所	172	143	81	38	14	2	0.695	0.446	0.257
10 散らかりによる生活への支障の程度	143	177	83	39	5	3	0.572	0.165	0.315
処分困難									
7 捨てる物を選別するストレスの程度	121	154	110	57	8	0	0.218	0.803	0.174
6 物を捨てる事へのストレスの程度	109	139	132	52	14	4	0.285	0.822	0.199
13 使わない物を、取っておきたい衝動	90	150	115	79	15	1	0.161	0.743	0.269
19 保管するスペースがないのに、不要品を捨てない頻度	105	162	107	65	10	1	0.381	0.814	0.267
23 捨てたいものを処分できない頻度	126	162	94	50	17	1	0.373	0.791	0.203
17 持ち物を処分する事を避ける頻度	105	152	91	74	17	11	0.425	0.627	0.169
*14 買い物や物をもらう癖への精神的苦痛の程度	124	164	128	25	5	4	0.278	0.494	0.217
*21 使わない物や必要のないものを買う(貰う)頻度	69	194	118	60	7	2	0.383	0.513	0.423
4 (逆転項目) 物を取っておきたいという衝動のコントロール	45	80	185	117	23	0	0.053	0.276	0.272
過剰入手									
2 (逆転項目) 物を入手したいという衝動のコントロール	45	96	206	89	12	2	0.015	-0.018	0.635
9 欲しい品物を入手できない場合の不快感の程度	53	168	135	80	13	1	0.107	0.178	0.652
11 使う予定のない物を入手したい衝動の程度	92	141	130	66	20	1	0.227	0.406	0.601
18 物を入手したいと思う頻度	88	174	115	57	16	0	0.189	0.426	0.542
16 買いすぎや溜め込みによる経済的困難の程度	177	129	104	32	8	0	0.316	0.381	0.533
*12 散らかりが原因でのストレスの程度	146	158	92	48	6	0	0.343	0.194	0.378

・各因子間の相関は以下のとおり。(散らかりvs処分困難:0.46, 散らかりvs過剰入手:0.4, 処分困難vs過剰入手:0.5)

注1 原版の改定SIR(Frost,et al.2004)では、質問14と質問21は第3因子に、質問12は第1因子として抽出されていた。

注2 因子数を4として、プロマックス回転した場合、質問2, 4が第4因子となって抽出された。

注3 欠損値に質問番号別平均値および、回答者別平均値をそれぞれ代入して解析を行った結果では、大きな相違はなかった。

付図1 「ためこみ状況によるストレス調査票 (SI-R)」の因子分析による分析結果 (最尤法, 斜交回転)

の回答結果 (105人, 77人) による総得点の平均値と臨床的に問題となる41以上の者を含む割合を比較した。今回調査に使用した「ためこみ状況によるストレス調査票」得点の平均値 (標準偏差) は34.4 (13.4) であり、一方、土屋垣内版では33.1 (16.0) であり、2群の平均値の差の学生t検定の結果、各群に有意な差はなかった。また、41以上を得点した者の割合にも有意差がなく、この2つの異なる翻訳版は、ほぼ同等の「ためこみ状況によるストレス状況」の把握が可能と考えられた。

4. まとめ

以上より、日本語翻訳版「ためこみ状況によるストレス調査票」の信頼性および妥当性について、看護・福祉系大学生を対象として検討した結果から有効性が示唆された。また、2つの翻訳版による得点の相違の検討においてもほぼ同等のためこみ状況によるストレス状況の把握が可能であったことから、今回使用の翻訳版でのためこみの状態とそれによるストレスへの検討を行うことは大きな問題はないと考えられた。